

## 岩手県内における看護活動の充実と普及に関する研究

研究3：模擬患者活用教育に関する研究

菊池和子、武田利明、高橋和眞（以上、教授）、似鳥徹、平野昭彦、井上都之、高橋有里（以上、准教授）、三浦奈都子（講師）、鈴木美代子（助教）、以上、岩手県立大学看護学部

### <要旨>

本研究では、模擬患者活用教育の充実のために模擬患者の育成と模擬患者活用教育を実施し、その効果が認められるとともにその課題も明らかになった。

### 1 研究の概要

模擬患者活用教育については、岩手県立大学看護学部の1, 2学年の基礎看護学実習 I,II の事前演習および4年生の看護技術統合演習のOSCE (Objective Structured Clinical Examination; 客観的臨床能力試験) において実施した他、イーハトーブレジデントスキルアップセミナーにおける研修医のOSCEにも参加した。またそれに伴った模擬患者のトレーニングを実施した。それに伴い、アンケート調査等により評価を行い、模擬患者活用教育の可能性と課題が明らかになった。本報告ではその一部を紹介する。



図1 OSCE会場全体

### 2 研究の内容

看護学部の統合技術演習(4学年)において、市民ボランティアによる模擬患者を活用し、評価者として看護学部卒業生である臨床看護師を活用したOSCEを実施した。援助内容は、イレウスを併発した片麻痺と難聴のある高齢患者(模擬患者)の腹部症状を観察し、安全に車椅子への移動介助であった。学生、評価者、模擬患者の3者に対し、事後にアンケート調査を実施、集計し、OSCEの改善のための評価を試みた。



図2 OSCEフィードバック場面

### 3 これまで得られた研究の成果

1)OSCE受験者である看護学部4年生：OSCEを受験した学生は、臨場感をもって真剣に取り組み、技術の再確認と実践能力の向上につながったと考えられる。特に模擬患者や実際に働いている卒業生を評価者として活用し、直接フィードバックやアドバイスを受けたことは有益であったと考える。しかし、本授業のOSCEが目的とする技術の到達度に関しては、学生の到達意識が低い傾向にあることや、「患者の移動ケア」以外に関連がなかったことから、今後技術について具体的に学べる演習内容や自主練習の期間や方法について検討が必要である。

2)評価者である本学部卒業生：看護学部卒業生を学部教育のOSCEの評価者として招請することは卒業生にとって多様な面で有益である。卒業前に行うOSCEとして妥当な内容ではあるが、卒業生による評価の信頼性を向上させるための評価基準の工夫、事前の講習による評価のすり合わせの徹底の必要が必要である。

3)模擬患者： 模擬患者にとって本科目のOSCEのシナリオは演じやすいものであったが、難聴の程度を把握してもらう工夫が必要である。フィードバックをOSCEのタイトなスケジュールの中で適切に行ってもらうためには、更なるトレーニングが必要である。参加した模擬患者自身にとって社会貢献となっており、市民の保健医療や看護教育、高齢者への意識を啓発する機会にもなっていた。

### 4 今後の具体的な展開

模擬患者のボランティア市民への影響、評価者への影響、学生への影響を総合的に分析してゆく様な分析を進めつつ、模擬患者活用教育の可能性を検証してゆく。